

庫裏を中心とした日本住宅系建築における見せかけ技法研究

A Study of Pretending Techniques in Japanese Residential Architecture with a Focus on “Kuri”,
Kitchen of Temple.

奈良女子大学 専任講師 坂井禎介

（研究計画ないし研究手法の概略）

筆者は、日本建築の美意識に興味をもっている。拙稿¹では、民家という生活のための素朴な建築に、さまざまな作為的な意匠操作（意匠をより美しくみせるための技法と筆者が定義）が存在することを明らかにした。しかし、他の建築形式ではどのような意匠操作が存在するか疑問を持ち、まず着目したのが民家と共通する点が多い「庫裏」であった。

・見せかけ技法の既往研究…日本建築の意匠のイメージはモダニズムの影響を強く受けている。1947年に太田博太郎が「日本建築の意匠については、構造材は外に現れており、構造材がすなわち意匠になる。…建築は飾り立てた美しさをもとめず、構造のもつ力学的な美しさを表す」²と提唱したことがモダニズム的日本建築意匠観をよく現している。しかし、見せかけの技法は多数存在するとともに、そこに当時の大工が目指した美意識を明確に読み取ることができ、注目が必要だと私は考えている。近年、1994年に藤井恵介が組物には見せかけの意匠が存在すること³、つまり構造と無関係な見せかけの意匠が存在することを提唱した。見せかけの意匠は、従来のモダニズム的建築意匠観を再考する重要な観点だが、その研究はほとんど進んでいない。

・庫裏の既往研究…庫裏の研究は少ないが、本格的な研究としては、2002年に永井規男による中世から近世初期までの庫裏の研究があげられる⁴。また、平井俊行⁵によって、庫裏の妻面は、宮城の瑞巖寺庫裏(図2)等を例に挙げ、下部の柱が8間なら上部の束割が10等分というように、上部の方が束割が細かいことを指摘するが、事例が3例のみである。

・研究手法…本研究では、既往研究で抜け落ちていた近世初期以降の全国的な庫裏意匠の研究を行うとともに、見せかけた意匠技法に着目することで、当時の庫裏に込められた美意識に迫ることを目標とする。

（実験調査によって得られた新しい知見）

・屋根…既往研究でよく指摘される「近世庫裏＝切妻妻入」の立面意匠は、臨濟宗庫裏の特徴である。また、宗派ごとに屋根形式や入口の向きが異なることがわかり、曹洞宗は平入で、密教は正面に入母屋を見せる。密教の慈眼寺庫裏(図3)では正面に入母屋を向けるが、背面は切妻として省略しており、密教の庫裏では正面側が入母屋であるべきという意匠意識が

¹ 坂井禎介 (2022.12) 『近世民家における意匠操作－見せかけ技法と寸法調整技法を通して－』中央公論美術出版、338p.

² 太田博太郎著『日本建築史序説 増補第三版』(2009年。初版は1947年)のp.20

³ 藤井恵介著『日本建築のレトリック／組物を見る』(INAX, 1994.3)

⁴ 永井規男「禅院庫裏の正面構成の変移について－妙心寺を中心として－」『日本建築学会近畿支部研究報告集』(日本建築学会, pp.869-872, 2002.05)、「中世五山における庫院とその変容」『建築史学 38』(永井規男, pp.2-31, 2002.03)

⁵ 平井俊行「第七項 妻飾り」『重要文化財妙心寺庫裏ほか五棟修理工事報告書』(京都府教育委員会、1993.2, p.90)

あったことを証明する。

・軒…民家で座敷側の軒だけ化粧小舞がつく例は、[坂井 2022]で取り上げたが、庫裏でも同様の例が多く見つけられた。最古例の黄梅院（図 1）ですでにそうである。正面けらばと正面向かって左側面に化粧小舞をつけるが、背面と右側面は裏手のスペースのため化粧小舞がつかない。軒の出が正面だけ大きい例も多くみられる（図 1 右上）

・組物…正面の組物は、全くないものが半数で、あるにしても舟肘木がほとんどである。装飾が多い庫裏では正面の桁上に平三斗（図 1 左下、図 5 左）が用いられるが、二手先以上の組物は無い。

・妻飾り…背面の妻飾を大きく省略することはほとんどの庫裏で共通する。破風板や懸魚は正面側にも背面側にも付くことが多いが、虹梁や海老虹梁は正面側だけの例（図 5）が多い。破風板は、正面だけ若葉のくり型や眉を施す例（図 5）がある。懸魚は、正面は三鼻懸魚だが背面は梅鉢懸魚の例（図 7）などがある。

・切妻の正面妻面で梁小口を隠す傾向…庫裏の内部の土間の上にかかる牛梁は土間中央に桁行方向に架けられ、大空間を支える構造であるとともに下からも見える。妻入の庫裏の場合、この牛梁の小口は正面となる妻面にも見えることになるのだが、この処理に様々な工夫を払っていた。最古の庫裏の黄梅院（図 1 左下、右上）ですでに梁が隠される。瑞巖寺（図 2）では梁を正面に見せるが、小口にクリ型をつけて虹梁鼻のように見せかける。雲峰寺（図 4 右上）は、梁小口が長方形に整形され、正面のちょうど中央に梁小口が見え、梁小口を妻飾装飾の一つとして上手くデザインされている。

・通し柱式から管柱式へ…通し柱式は、すでに最古の黄梅院で見られるが、正面のみ通し柱式（図 1 左下）で、裏面は管柱を使用する（図 1 左上）ことから、通し柱式を正面に見せる意識が明らかである。管柱式の初例は、龍吟庵（1603）だが、柱間が不均一で、過渡的な事例である。瑞巖寺（図 2,1609）で、上部の束と下部の柱が整然と配置されるとともに妻飾りが整い、管柱式が完成する。雲峰寺では、背面は通し柱式（図 4 左上）だが、正面の柱位置だけ内部の柱筋とずらす（図 4 中下）ことで、正面だけを左右対称かつ管柱式（図 4 右上）とする。雲峰寺の例からは、管柱式が内部構造の表出というより、ある種のファッションのような意匠として張り付けられることがわかる。

・柱と束…柱と束を正面だけ 1 間間隔に見せる意匠操作（図 1）、正面だけ太い柱や五平柱を使う意匠操作（図 1、臨濟宗で多い）、庫裏の左右対称を強調するために下屋をセットバックする意匠操作（図 4 右下、中下）、正面の柱間隔を等間隔に見せるため内部の柱筋とずらす意匠操作（図 1 黄梅院、図 4 雲峰寺）が発見された。

・土台…正面側だけ土台を見せる例（図 3 慈眼寺、図 4 雲峰寺、図 7 善導寺）がある。既往研究では土台は柱の足元を固める構造材だと考えられてきたが、意匠的にも重要な部材だったことを示す。

・まとめ…庫裏の意匠は、構造が即ち意匠となるという、太田博太郎のモダニズム的意匠観（先述）の典型的な反例であろう。特に、図 3 の慈眼寺では、内部構造をそのまま見せたのが背面だが、正面には構造を見せず入母屋屋根を見せる。このことから、近世の庫裏では、構造をそのまま外部の意匠とすることは好まれなかったとわかる（類例は図 4 左）。

庫裏は本堂や客殿と比べれば内向の建物で、寺の僧侶のみが見て過ごす、炊事場兼食事室兼執務室である。来訪者から見えるのは正面外壁のみなので、その意匠だけ整えて、僧侶のみが見るそれ以外の箇所は極力経費を削減しようとしたのだろう。他にも、表と裏またはハ

レとケの空間意識や、外向きの空間よりも内々の空間意匠の格を下げるべきという、ある種の謙遜の意識があるのではないか。背面になく正面側にだけつけられる意匠は、構造的に必要なものではなく、近世庫裏として備えるべき意匠のセットだったと解釈すべきであろう。

(発 表 論 文)

「近世庫裏の立面意匠の研究—重要文化財庫裏や台所の外観の正面性の強い意匠操作を中心に—」と題して、査読付き論文を投稿し、審査中。

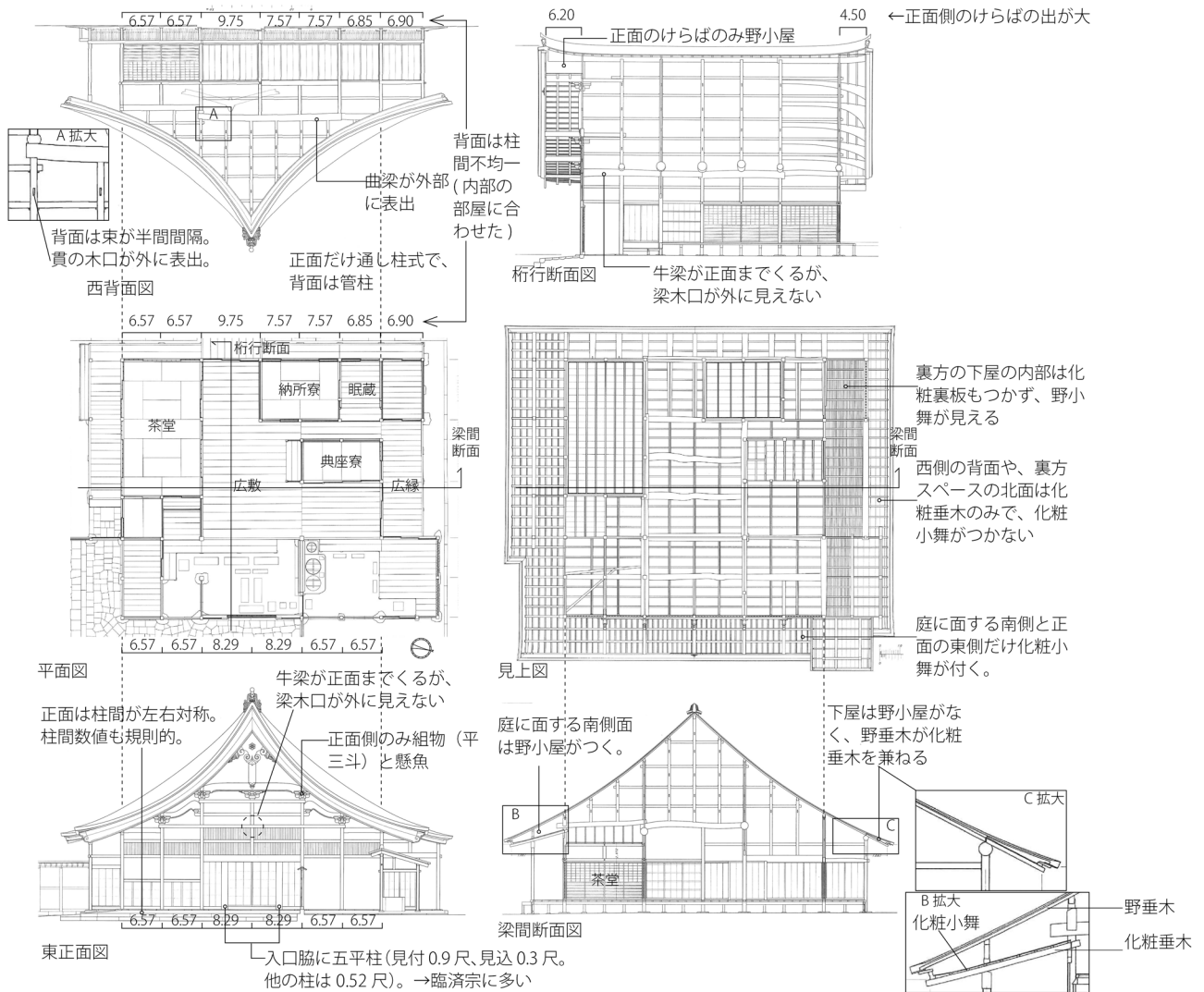


図1 1589年 黄梅院庫裏(臨濟宗大徳寺派、京都)最古だが、すでに様々な意匠要素が出そろう。

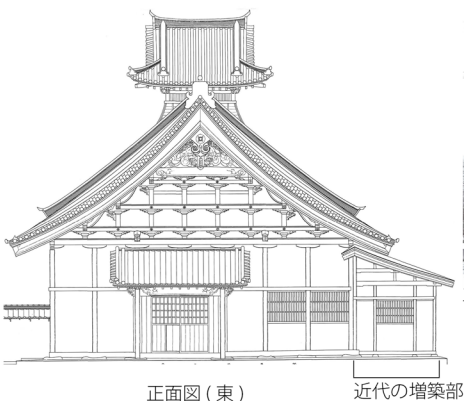


図2 1609年頃 瑞巖寺 庫裏(臨濟宗妙心寺派、宮城)

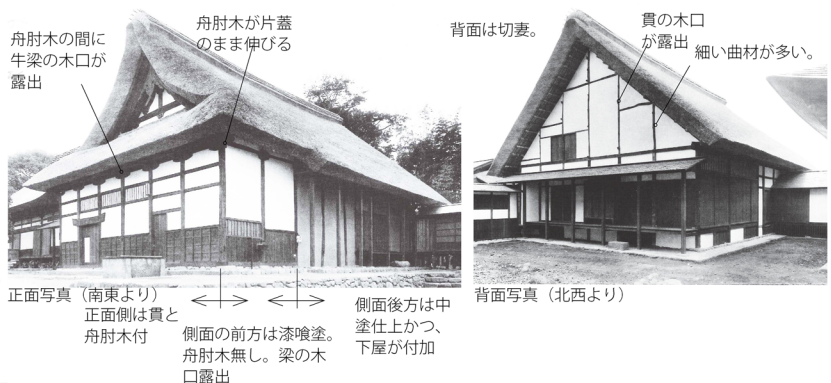


図3 1650年頃 慈眼寺庫裏(真言宗、山梨)

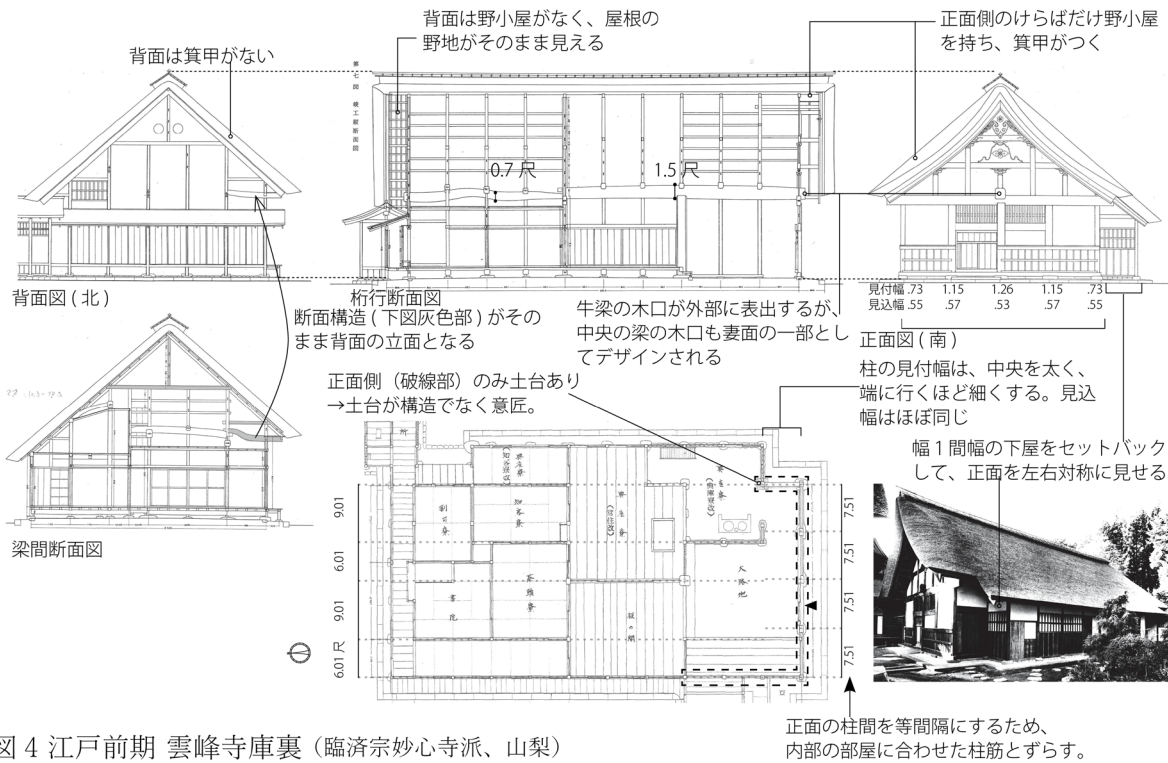


図4 江戸前期 雲峰寺庫裏(臨濟宗妙心寺派、山梨)

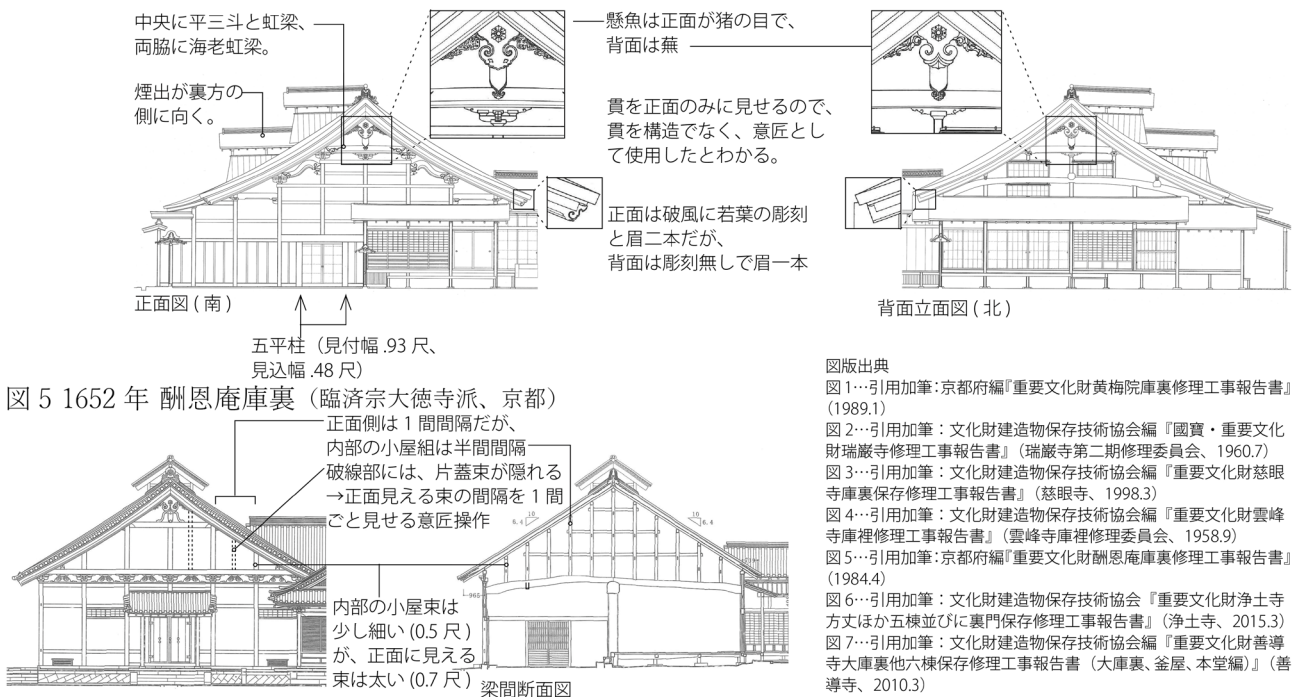


図5 1652年 酬恩庵庫裏(臨濟宗大徳寺派、京都)

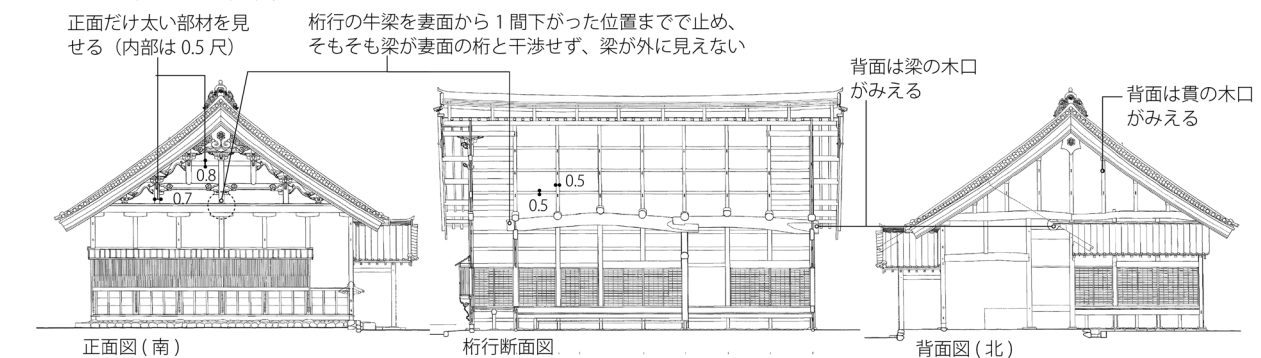


図6 1719年 浄土寺庫裏(律宗、広島)



図7 1749年 善導寺大庫裏(浄土宗、福岡)